Cisco Cloud Network Controller について

概要

Cisco Cloud Network Controller は、クラウドベースの仮想マシン（VM）に展開する Cisco APIC のソフトウェア展開です。Amazon Web Services（AWS）、Azure、および Google Cloud は、Cisco Cloud Network Controller でサポートされるクラウド プロバイダーです。

展開されると、Cisco Cloud Network Controller は以下を実行します。

- AWS パブリッククラウドと対話するための既存の Cisco APIC と同様のインターフェイスを提供します
- クラウド構成の展開と構成を自動化します
- クラウド ルータ コントロール プレーンを設定します
- オンプレミス Cisco ACI ファブリックとクラウドサイト間のデータ パスを設定します
- Cisco ACI ポリシーをクラウド ネイティブ コンストラクトに変換します
- エンドポイントを検出します
- オンプレミスのデータセンターまたはパブリック クラウドの両方またはいずれかに展開されたワークロードに対して一貫したポリシー、セキュリティ、および分析を提供します

（注）
- Cisco Nexus Dashboard Orchestrator は、MP-BGP EVPN 構成をオンプレミスのスパイン スイッチにプッシュします
- オンプレミス VPN ルーターには、IPsec の手動構成が必要です

- オンプレミスのデータセンターとパブリック クラウド間の自動接続を提供し、プロビジョニングとモニタリングを容易にします。
- ポリシーは Cisco Nexus Dashboard Orchestrator によってオンプレミスおよびクラウド サイトにプッシュされ、Cisco Cloud Network Controller はポリシーをクラウド向けに変換して、ポリシーをオンプレミス サイトと一致させます。

パブリック クラウドに Cisco ACI を拡張することの詳細については、*Cisco Cloud Network Controller Installation Guide* を参照してください。

Cisco Cloud Network Controller が稼働している場合は、Cisco Cloud Network Controller コンポーネントの追加と構成を開始できます。このドキュメントでは、Cisco Cloud Network Controller ポリシー モデルについて説明し、GUI および REST API を使用して Cisco Cloud Network Controller コンポーネントを管理 (追加、構成、表示、および削除) する方法について説明します。

外部ネットワーク接続

AWS と Cisco Cloud Network Controller の外部ネットワーク接続は、インフラ VPC の CCR からの EVPN 接続を使用することによってのみ利用可能でした。インフラ VPC CCR から IPSec/BGP を使用する任意の外部デバイスへの IPv4 接続もサポートされます。この IPSec/BGP 外部接続により、Cisco Cloud Network Controller をブランチ オフィスに接続できます。

次の項では、外部ネットワーク接続を可能にするコンポーネントの詳細について説明します。

外部VRF

外部VRF は、クラウドに存在しない一意の VRF ですが、1 つ以上の外部ネットワークに関連付けられています。VPC をホストするために使用され、クラウド コンテキスト プロファイルに関連付けられている VRF である内部 VRF とは対照的に、外部VRF は、Cisco Cloud Network Controller で使用されるどのクラウド コンテキスト プロファイルでも参照されません。

外部VRF は、他のクラウドサイトまたはオンプレミスサイトに接続されている外部ネットワークを表します。複数のクラウド VRF は、外部VRF にルートをリークしたり、外部VRF からルートを取得したりできます。外部VRFで外部ネットワークが作成されると、VRF 間ルーティングが設定され、外部ネットワークで受信およびアドバタイズされたルートが 外部VRF で受信またはアドバタイズされます。

非 ACI 外部デバイスへの接続

AWS CCR から ACI 以外の外部デバイスへの接続もサポートされています。インフラ VPC CCR からこれらの非 ACI 外部デバイスへの IPv4 セッションが 外部VRF で作成され、外部VRF とサイト ローカル VRF の間で VRF 間ルーティングが設定されます。

このタイプの接続に関する注意事項と制限事項を次に示します。

- EVPN と IPv4 IPSec/BGP の両方を使用して、クラウドから同じリモート サイトに接続することはできません。

注意事項と制約事項

すべてのリージョンを手動で選択する代わりに、外部ネットワーク接続に対して `allRegion` を true に設定する必要があります。

サポートされているルーティングとセキュリティ ポリシーの概要

ルーティングとセキュリティ ポリシーは、Cisco Cloud Network Controller で実行しているリリースに応じて、異なる方法で処理されます。

ルーティングおよびセキュリティ ポリシー: 25.0(1) より前のリリース

リリース 25.0(1) より前のリリースでは、ルーティング ポリシーとセキュリティ ポリシーは緊密に結合されていました。EPG にまたがる 2 つのエンドポイント間の通信を許可するには、コントラクトを構成する必要があります。これらのコントラクトは、次の目的で使用されます。

- **ルーティング ポリシー**：トラフィック フローを確立するルートを定義するために使用されるポリシー
- **セキュリティ ポリシー**：セキュリティ グループ ルール、ネットワーク セキュリティ ルールなど、セキュリティ目的で使用されるルール

つまり、コントラクトは本質的に、セキュリティ ポリシーとルーティング ポリシーの両方を構成するという 2 つの目的を果たします。つまり、コントラクトを破棄すると、許可するトラフィックと拒否するトラフィックを管理するセキュリティ ポリシーが破棄されるだけでなく、そのトラフィックのルーティングに使用されるポリシーも破棄されます。リリース 25.0(1) より前では、セキュリティ ポリシーを設定せずにルーティング ポリシーを設定する方法はなく、その逆も同様です。

ルーティングおよびセキュリティ ポリシー: リリース 25.0(1)

リリース 25.0(1) 以降、セキュリティ ポリシーから独立して、ルーティングを個別に構成するためのサポートが利用できるようになりました。

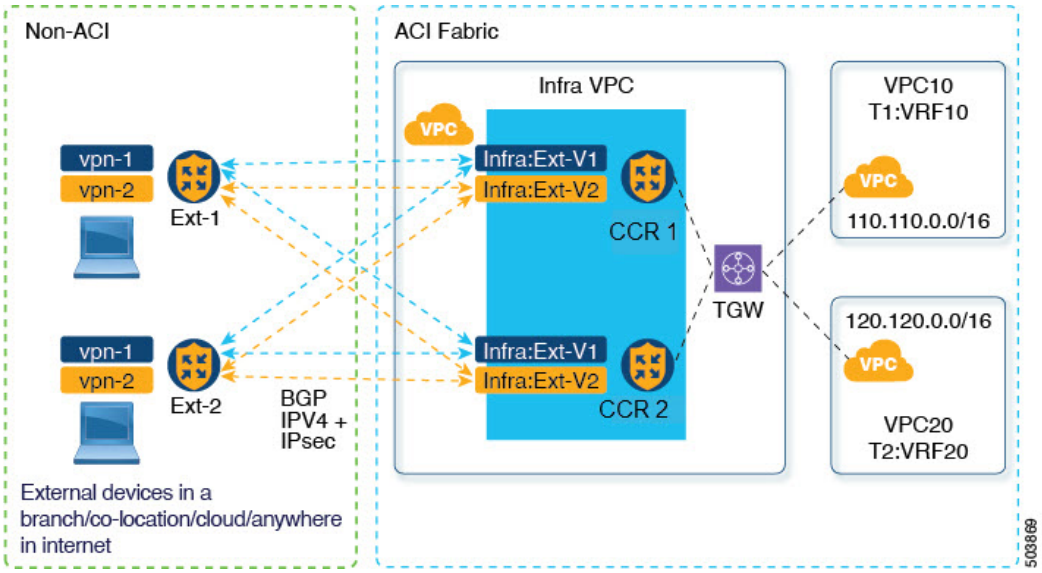
（注） このセクションで説明するルーティングおよびセキュリティ ポリシーは、25.0(1) リリース専用であり、内部と外部VRF の間でのみ適用されます。 25.0(2) リリースでのルーティング ポリシーとセキュリティ ポリシーの変更については、ルーティング ポリシー: リリース 25.0(2) （6 ページ） を参照してください。

ルーティングおよびセキュリティ ポリシーを構成する手順は次のとおりです。

- **ルーティング ポリシー**: リリース 25.0(1) で導入された VRF 間ルーティング機能を使用して、ルーティング ポリシーを個別に設定します。これらの手順については、Cisco Cloud Network Controller GUI を使用した VRF 間ルート リークの構成 を参照してください。
- **セキュリティ ポリシー** : ルーティング ポリシーを構成した後、セキュリティ ポリシーを個別に構成するために以前に行ったように、引き続きコントラクトを使用します。
  - まず、外部 EPG を作成します。これらの手順については、Cisco Cloud Network Controller GUI を使用した EPG の作成 を参照してください。
  - 次に、外部 EPG とクラウド EPG の間のコントラクトを作成します。これらの手順については、Cisco Cloud Network Controller GUI を使用したコントラクトの作成 を参照してください。

VRF 間ルーティングを使用すると、独立したルーティング ポリシーを構成して、次のタイプのサイト間のルーティングを設定するときに、内部のペアと外部VRF の間でリークするルートを指定できます。

次の図は、この種の構成のトポロジ例を示しています。このトポロジ例は、ACI 以外のサイトにある可能性のある外部デバイス (Ext-1) の背後にあるリモート エンドポイント (vpn-1) に接続する方法を示しています。この非ACI サイトは、ブランチ オフィス、同じ場所にあるサイト、クラウド サイト、または BGP IPv4 および IPSec の機能を備えたインターネット上の任意の場所である可能性があります。



この例では、infra:Ext-V1 はインフラ VPC の CCR 上の 外部VRF にあり、リモート デバイスへの IPSec トンネルを介した BGP IPv4 セッションがあります。リモート エンドポイント ルートは、これらのセッションを介して infra:Ext-V1 VRF で受信され、図の右側に表示されている内部 VRF (たとえば、VPC10 の T1:VRF10) にリークされます。逆リーク ルートも設定されています。

ルート リークは、ルート マップを使用して内部 VRF と外部 VRF の間で発生します。Cisco Cloud Network Controller では、ルート マップを使用して、内部 VRF から 外部VRF へ、および外部VRF から内部 VRF へのセキュリティ ポリシーとは独立したルーティング ポリシーを構成できます。内部 VRF のペア間のルーティングを設定するときに引き続きコントラクトを使用するため、内部 VRF 間のルーティング時に、ルーティング ポリシーとセキュリティ ポリシーが設定プロセスで結び付けられます。

次のリストは、**ルート マップ**を使用してセキュリティ ポリシーから独立してルーティング ポリシーを構成できる状況、およびルーティング ポリシーとセキュリティ ポリシーが結び付けられている**コントラクト**を使用する必要がある状況に関する詳細を示しています。

- コントラクトベースのルーティングを使用するルーティングの状況:
  - サイト内ルーティング（リージョン内およびリージョン間）
  - サイト間ルーティング（EVPN を使用したオンプレミスのクラウドから ACI）
  - クラウド間ルーティング
  - 内部 VRF 間のルート リーク
- ルート マップベースのルーティングを使用するルーティングの状況:
  - L3Out 外部VRF を使用したクラウドから非 ACI オンプレミス サイトへ (EVPN なし)
  - 内部 VRF から 外部VRF への特定のルートまたはすべてのルートをリークします。
  - 外部VRF から内部 VRF への特定のルートまたはすべてのルートをリークする

リリース 25.0(1) のセキュリティおよびルーティング ポリシーの注意事項と制約事項

VRF 間ルーティングを使用してルートマップを使用して VRF ペア間のルートをリークする場合は、次の注意事項が適用されます。

- ルートは常に、内部 VRF と外部 VRF の間で双方向にリークされます。

  たとえば、内部 VRF (V1) と外部 VRF (Ext-V1) を持つユーザー テナント (t1) があるとします。ルート リークは、これらの VRF の両方に対して双方向に設定する必要があります。

- 「より大きな」プレフィックスがすでにリークされている間に、「より小さな」プレフィックスをリークするように設定することはできません。たとえば、10.10.0.0/16 プレフィックスがすでにリークされるように設定されている場合、10.10.10.0/24 プレフィックスの設定は拒否されます。同様に、0.0.0.0/0（すべてリーク）プレフィックスを設定した場合、他のプレフィックスは設定できません。
- クラウド外部 EPG (cloudExtEpgs) 間の契約は許可されていません。
- 外部VRF は、クラウド EPG の作成には使用できません。
- 外部VRF は常にインフラ テナントに属します。
- 外部VRF 間のリーク ルーティングはサポートされていません。

ルーティング ポリシー: リリース 25.0(2)

（注） このセクションで説明するルーティングおよびセキュリティ ポリシーは、25.0(2) リリース専用です。以前のリリースでのルーティング ポリシーとセキュリティ ポリシーの変更については、ルーティングおよびセキュリティ ポリシー: リリース 25.0(1) （3 ページ） を参照してください。

リリース 25.0(2) では、ルーティング ポリシーとセキュリティ ポリシーは、ルーティングおよびセキュリティ ポリシー: リリース 25.0(1) （3 ページ） で説明されているように引き続き分割されますが、特にルーティング ポリシーに次の変更が追加されています。

内部 VRF 間のルート リーク

以前の 25.0(1) リリースでは、内部 VRF と外部 VRF のペア間でリークするルートを指定する独立したルーティング ポリシーを設定できる、VRF 間ルート マップベースのルーティング機能が導入されました。このルート マップ ベースのルーティング機能は、特に内部 VRF と外部 VRF の間に適用されます。内部 VRF のペア間のルーティングを設定する場合、ルーティング

およびセキュリティ ポリシー: リリース 25.0(1) （3 ページ）で説明されているように、その状況ではコントラクトベースのルーティングのみを使用できます。

リリース 25.0(2) 以降、内部 VRF のペア間でのルート マップベースのルート リークがサポートされるようになりました。次のいずれかのオプションを使用して、ルートをリークする方法を指定します。

- 次を使用して、VRF に関連付けられているすべての CIDRS または特定のサブネット IP アドレスをリークします。
  - GUI を介した **Leak All** オプション
  - REST API を介した `leakInternalPrefix` フィールド
- 次を使用して、VRF のペア間でリークします。
  - GUI による **サブネット IP** オプション
  - REST API を介した `leakInternalSubnet` フィールド

グローバルな Inter-VRF ルート リーク ポリシー

内部 VRF のペア間でのルート マップ ベースのルート リークのサポートに加えて、内部 VRF ルート リーク ポリシーでは、コントラクト ベースのルーティングまたは内部 VRF のペア間のルートマップベースのルーティングを使用するかどうかを選択することもできます。これは、初回セットアップで利用可能なグローバル モード構成であり、コントラクトベースまたはルートマップ ベースのモデルを可能にします。このグローバル モードでコントラクト ベース ルーティングを有効にすると、ルートマップがない場合にのみ、コントラクトを使用して内部 VRF のペア間のルートがリークされる可能性があることに注意してください。

このポリシーには、次の特性があります。

- このポリシーは、すべての内部 VRF に関連付けられています。
- これは Cisco Cloud Network Controller で作成されたポリシーです。
- 契約ベースのルーティングは、グリーンフィールド ケースに対してデフォルトで無効になっています（オフになっています）（Cisco Cloud Network Controller に初めて構成する場合）。アップグレードの場合、リリース 25.0(2) より前に設定された Cisco Cloud Network Controller がある場合、コントラクトベースのルーティングが有効になります (オンになります)。

内部 VRF ルート リーク ポリシーは、インフラ テナントの First Time Setup 画面で設定されるグローバル ポリシーです。ここでは、ブール フラグを使用して、ルート マップがない場合にコントラクトがルートを駆動できるかどうかを示します。

- **オフ**: デフォルト設定。ルートはコントラクトに基づいて漏洩するのではなく、ルートマップに基づいて漏洩します。

- **オン**: ルート マップが存在しない場合、コントラクトに基づいてルートが漏洩します。有効にすると、ルート マップが構成されていないときにコントラクトがルーティングを駆動します。ルート マップが存在する場合、ルート マップは常にルーティングを駆動します。

この Boolen フラグを前後に切り替えることができます。次に、このグローバル VRF ルート リーク ポリシーを切り替えるための一般的な推奨手順を示します。詳細な手順は、Cisco Cloud Network Controller GUI を使用した内部 VRF のリーク ルートの構成 で提供されています。

- EVPN を使用したマルチクラウドおよびハイブリッド クラウドの展開では、Cisco Cloud Network Controller でコントラクト ベースのルーティングを有効にする必要があります。
- EVPN を使用しないマルチクラウドおよびハイブリッド クラウドの展開の場合、ルーティングは、コントラクトではなくルート マップのみを介して実行されます。
- コントラクト ベースのルーティングからルート マップ ベースのルーティングに切り替える (**オフ**設定に切り替える) ことによってコントラクト ベースのルーティングを無効にする場合、**オフ**に設定する前にルート マップ ベースのルーティングが構成されていないと、このアクションは混乱を招く可能性があります。

  ルート マップ ベースのルーティングに切り替える前に、次の設定変更を行う必要があります。

  1. 既存のコントラクトを持つ VRF のすべてのペア間でルート マップ ベースのルート リークを有効にします。
  2. グローバル ポリシーでコントラクト ベースのルーティング ポリシーを無効にします。

  その時点で、ルーティング ポリシーをルート マップ ベースのルーティングに変更できます。その後、新しいルート マップ ベースのルーティングで必要な粒度を反映するようにルーティングを変更できます。
- ルート マップ ベースのルーティングからコントラクト ベースのルーティングに切り替える (**オン**設定に切り替える) ことでコントラクト ベースのルーティングを有効にする場合は、コントラクト ベースのルーティングに切り替える前に構成を変更する必要はありません。これは、この設定が追加操作であるためです。つまり、コントラクト ベースとルート マップ ベースの両方のルーティングを、VRF のペア間で有効にすることができます。ルーティングを有効にする場合、ルート マップはコントラクトよりも優先されます。ルート マップ ベースのルーティングを有効にすると、コントラクト ベースのルーティングの追加は中断がないようにしなければなりません。

注意事項と制約事項

次の注意事項および制約事項は、リリース 25.0(2) に適用されます。

- 外部 VRF と内部 VRF 間のルーティングでは、引き続きルート マップ ベースのルーティングのみが使用されます。
- `leakExternalPrefix` は、インターネット ゲートウェイ (SSH を実行する外部 EPG 用に構成された外部エンドポイント セレクタ) へのルートと重複してはなりません。そうしないと、SSH が壊れます。

トンネルのソース インターフェイスの選択

異なる外部ネットワークから同じ接続先への複数のトンネルを使用するためのサポートが利用可能です。これは、GUI でさまざまなソース インターフェイス (2、3、または 4) を使用するか、`cloudtemplateIpseTunnlSourceInterface` を使用して REST API を介して実行されます。

次の例は、インターフェイス 3 だけが発信元インターフェイスとして使用される状況を示しています。

```
<cloudtemplateIpSecTunnel peeraddr="173.36.19.2" preSharedKey="def" poolname="pool1">
    <cloudtemplateIpSecTunnelSourceInterface sourceInterfaceId=”3” />
 </cloudtemplateIpSecTunnel>
```

次の例は、インターフェイス 2 と 3 の両方が発信元インターフェイスとして使用されている状況を示しています。

```
<cloudtemplateIpSecTunnel peeraddr="173.36.19.2" preSharedKey="def" poolname="pool1">
    <cloudtemplateIpSecTunnelSourceInterface sourceInterfaceId=”2” />
    <cloudtemplateIpSecTunnelSourceInterface sourceInterfaceId=”3” />
</cloudtemplateIpSecTunnel>
```

注意事項と制約事項

- インターフェイスの数を増やすと、トンネルの内部ローカル IP アドレスの需要が増加します。
- IPsec トンネル ソース インターフェイスの機能は、IKEv2 構成でのみサポートされます。

Cisco Cloud Network Controller の一般的な注意事項と制限事項

ここでは、Cisco Cloud Network Controller の注意事項と制限事項について説明します。

- VRF の 1 つが別の VRF グループ (ハブ ネットワーク) の接続として存在する場合、サイト間 (VRF から VRF) トラフィックはサポートされません。たとえば、次のシナリオを考えてください。
  - VRF-1 は、さまざまなサイト (Azure と AWS) にまたがっています。AWS サイトでは、VRF-1 は VRF グループ 1 にあります。
  - VRF-2 は、別の VRF グループ (VRF グループ 2) に存在します。

  このシナリオでは、VRF 間のコントラクトにより異なる VRF グループ間のトラフィックも暗黙的に許可されるため、サイト間の VRF-2 から VRF-1 へのトラフィックはサポートされません。異なる VRF グループ (ハブ ネットワーク) 間のトラフィックはサポートされていません。

- CCR（クラウドルータ）で VRF 間ルートリークを使用しているときに、オンプレミスとクラウドの間で複数の VRF をストレッチすることはできません。たとえば、EPG1 を持つ VRF1 が拡張され、EPG2 を持つ VRF2 も拡張される状況では、EPG1 は EPG2 とコントラクトできません。ただし、クラウド内に複数の VRF を設定して、1 つのオンプレミス VRF と 1 つ以上のコントラクトを共有することができます。
- クラウド上の CSR にアドバタイズするために、外部でアドバタイズされたオンプレミスサイトのブリッジ ドメイン サブネットを設定します。
- デフォルトの AWS セキュリティ グループ（SG）ルールでは、リージョンごとに 2 つの CCR のみが許可され、2 つのリージョンのみが CCR を展開できます（合計で最大 4 つの CCR）。より多くの CCR を展開するには、AWS SG ルールの制限を 120 以上に増やします。ルールの制限を 500 に増やすことをお勧めします。
- テナントのオブジェクトを設定するときに、AWS の古いクラウドリソースを確認します。アカウントを管理していた以前の Cisco Cloud Network Controller インスタンスから古い設定を適切に消去していなかった場合、残っている可能性があります。

（注） テナント アカウント ID を追加した後、Cisco Cloud Network Controller が古いクラウド リソースを検出するには時間がかかります。

古いクラウド リソースを確認し、クリーンアップするには、次の手順を実行します。

1. **[ナビゲーション（Navigation）] メニュー** > **[アプリケーション管理（Application Management）]** > **[テナント（Tenants）]**の順にクリックします。**[テナント（Tenants）]** サマリー テーブルは、テナントのリストとともに、サマリー テーブルの行として作業ペインに表示されます。
2. オブジェクトを作成するテナントをダブルクリックします。**[概要（Overview）]**、**[クラウド リソース（Cloud Resources）]**、**[アプリケーション管理（Application Management）]**、**[統計（Statistics）]**、および**[イベント分析（Event Analytics）]** タブが表示されます。
3. **[クラウド リソース（Cloud Resources）]** > **[アクション（Actions）]** > **[古いクラウド リソースの表示（View Stale Cloud Objects）]** の順にクリックします。**[古いクラウド オブジェクト（Stale Cloud Objects）]** ダイアログボックスが表示されます。
4. 古いオブジェクトが見つかった場合は、**[古いクラウドオブジェクトを自動的にクリーンアップする]** チェック ボックスをクリックしてチェック マークを付けます。
5. [保存（Save）] をクリックします。Cisco Cloud Network Controller は、古いクラウド オブジェクトを自動的にクリーンアップします。

（注） 自動クリーンアップを無効にするには、手順 1 ～ 4 に従って、**[古いクラウド オブジェクトを自動的にクリーンアップする]** チェック ボックスをクリックしてチェック マークを外します。

- Cisco Cloud Network Controller は、作成した Azure リソースの管理を試みます。既存のリソースをインベントリとしてリストするのではなく、他のアプリケーションによって作成されたリソースの管理を試みません。同時に、AWS インフラテナント アカウントの AWS IAM ユーザー、および他のテナント アカウントには、Cisco Cloud Network Controller が作成するリソースを妨害しないことが求められます。このため、Cisco Cloud Network Controller が AWS 上で作成するすべてのリソースには、次の 2 つのタグの少なくとも 1 つがあります。
  - AciDnTag
  - AciOwnerTag

  Cisco Cloud Network Controller は、EC2、またはその他のリソースを作成、削除、または更新する権限を持つ AWS IAM ユーザーが、Cisco Cloud Network Controller によって作成され、管理されるリソースへアクセスすることや変更することを防止する必要があります。このような制限は、インフラとその他のユーザのテナント アカウントの両方に適用する必要があります。AWS アカウント管理者は、上記の 2 つのタグを使用して、意図しないアクセスや変更を防ぐ必要があります。たとえば、次のようなアクセス ポリシーがあれば、Cisco Cloud Network Controller によって管理されているリソースへのアクセスを防止することができます。

```
{
  "Effect": "Deny",
  "Action": [
    "ec2:*"
  ],
  "Resource": "*",
  "Condition": {
    "StringLike": {"ec2:ResourceTag/AciDnTag": "*"}
  }
}
```

- 共有 L3Out を構成する場合:
  - オンプレミスの L3Out とクラウド EPG をテナント共通にすることはできません。
  - オンプレミスの L3Out とクラウド EPG が異なるテナントにある場合は、テナント共通でコントラクトを定義します。オンプレミス サイトまたはクラウド テナントでコントラクトすることはできません。
  - オンプレミスの L3Out 外部 EPG（l3extInstP）でクラウド EPG の CIDR を指定します。
  - オンプレミスの L3Out が別の VRF のクラウド EPG とコントラクトしている場合、クラウド EPG が存在する VRF をオンプレミス サイトに拡張することはできず、オンプレミス サイトの他の VRF とコントラクトすることはできません。 。

- オンプレミスの外部 EPG で外部サブネットを構成する場合:
  - 外部サブネットをゼロ以外のサブネットとして指定します。
  - 外部サブネットは、別の外部サブネットと重複できません。
  - クラウド EPG とコントラクトするには、共有ルート制御フラグを使用して外部サブネットをマークします。
- オンプレミスの外部 EPG でマークされている外部サブネットは、L3Out のルーティングプロトコルを介して学習されているか、静的ルートとして作成されている必要があります。

- アベイラビリティーゾーンをマッピングするときは、Cisco Cloud Network Controller で a または b のみを選択します。内部的には、ゾーン マッピング機能により、これが AWS の実際のアベイラビリティ ゾーンにマッピングされます。

（注） マッピングがアルファベット順になっていない可能性があります。アベイラビリティーゾーンはアルファベット順に並べ替えられ、関数は最初の 2 つを選択し、それらを Cisco Cloud Network Controller のゾーン a と b に関連付けます。

- クラウドルーターに ASN 64512 を設定すると、クラウドルーターと AWS 仮想プライベート ゲートウェイの間で BGP セッションが機能しなくなります。
- サポートされているスケールの合計については、次のサポートされているスケールの表を参照してください。

（注） サポートされているスケールの表で指定されているスケールを使用する場合:
- 合計で 4 つの管理対象リージョンのみを持つことができます。
- 2 つのリージョン、2 * 2 CCR でのみ CCR を持つことができます。これは、AWS SG ルールの制限に関係ありません。

表 *1:* サポートされるスケール

コンポーネント	サポートされている数
テナント	20
アプリケーション	500

コンポーネント	サポートされている数
EPG	500
クラウド エンドポイント	1000
VRF	20
クラウド コンテキスト プロファイル	40
コントラクト	1000
サービスグラフ	200
サービス デバイス	100

Cisco Cloud Network Controller GUI について

Cisco Cloud Network Controller GUI は、関連するウィンドウのグループに分類されます。各ウィンドウでは、特定のコンポーネントにアクセスして管理できます。GUIの左側にある**[ナビゲーション（Navigation）]**メニューを使用して、ウィンドウ間を移動します。メニューのいずれかの部分にマウスを移動すると、**[ダッシュボード（Dashboard）]**、**[トポロジ（Topology）]**、**[アプリケーション管理（Application Management）]**、**[クラウドリソース（Cloud Resources）]**、**[操作（Operations）]**、**[インフラストラクチャ（Infrastructure）]**、および**[管理（Administrative）]**タブのリストが表示されます。

各タブには異なるサブタブのリストが含まれており、各サブタブから異なるコンポーネント固有のウィンドウにアクセスできます。たとえば、テナント固有のウィンドウを表示するには、マウスを**[ナビゲーション（Navigation）]**メニューに合わせ、**[アプリケーション管理（Application Management）]** > **[テナント（Tenants）]**をクリックします。そこから、**[ナビゲーション（Navigation）]**メニューを使用して別のコンポーネントの詳細を表示できます。たとえば、**[クラウド リソース（Cloud Resources）][アベイラビリティ ゾーン（Availability Zones）]**をクリックすると、**[テナント（Tenants）]**から **>[アベイラビリティ ゾーン（Availability Zones）]** ウィンドウに移動できます。

[インテント（Intent）]メニューバーアイコンを使用すると、GUI の任意の場所からコンポーネントを作成できます。たとえば、**[アベイラビリティ ゾーン（Availability Zones）]** ウィンドウの表示中にテナントを作成するには、**[インテント（Intent）]**アイコンをクリックします。検索ボックスとドロップダウン リストを含むダイアログが表示されます。ドロップダウン リストをクリックして**[アプリケーション管理（Application Management）]** を選択すると、**[テナント（Tenant）]**オプションを含むオプションのリストが表示されます。**[テナント（Tenant）]**オプションをクリックすると、テナントの作成に必要なフィールドのグループを示す**[テナントの作成（Create Tenant）]** ダイアログが表示されます。

Cisco Cloud Network Controller コンポーネントの構成の詳細については、Cisco Cloud Network Controller コンポーネントの構成 を参照してください。

翻訳について
このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。